

研究論文

あくまでも幻想として ——女性向けマンガの「年の差」恋愛ジャンルにみる 女性の欲望

五十嵐舞

要旨

本稿は、女性向けマンガの若い女性ヒロインと中年や初老の男性の恋愛を描く「年の差」ジャンルに関する幻想とリアリティの交渉を検討する。少女マンガやヤングレディースというジャンルは共感を根幹に、読者の現実と重なり合うか、あるいは現実の制約を無視すれば肯定したくなるような作品とされてきた。しかし、若い女性との交際を望む男性の欲望と、加齢に関する二重基準などのミソジニな価値観の親和性の高さに対する認識からは、現実との間の別様の説明を必要とする。本稿では、女性向けポルノグラフィに関する幻想とリアリティに関する視座を手がかりに、「年の差」ジャンルのコードを検討する。まず、男性の容姿の分析からは二種類の男性像が明らかになる。顔や首のシワや筋肉が落ちた体型などによって加齢が外見に書き込まれる人物と、外見にさほど年齢が反映されない人物である。しかし、前者の男性も脇役の人物と比べると、鼻筋の通った顔やのびた背筋といった優れた容貌をしている。加えて、彼らは仕事だけでなく家事も手際よく行い、ヒロインを親身に支える。すなわち、彼らは老いが描かれることによって実在しそうと錯覚させるが、実際には、少女マンガのいわゆるスパダリのような人物であることが明らかになる。続いて、実社会であれば暴力に該当し得るような関係性や行為に関する分析からは、ヒロインの内面のモノローグによる再意味付けといった女性向けポルノグラフィと共通する手法の他に、ジャンル特有のコードがあることが導かれる。それは、老いた男性の身体から性的なものが切り離されることや、ヒロインの選択という行為に付随して、ヒロインが主体性を獲得する物語に物語の主題を変化させる手法である。人物デザインやプロットを通じて、家父長制的価値観や現実社会の暴力と切り離されることで、女

性たちが楽しむことが可能な幻想としての物語が成立する。こうした幻想の物語の様相を明らかにすることは、葛藤を伴う女性たちの欲望への理解を提供する。

キーワード：

女性向けマンガ、年の差恋愛、女性の欲望、フェミニズム、加齢に関する二重基準

1 はじめに：「年の差」ジャンルの消費をめぐる葛藤

2000年代後半頃より女性向けマンガに登場する、20代や30代のヒロインと40前後から60代といった中年や初老の男性が結ばれる物語は、若い女性と年長の男性という組み合わせがあまりにも手垢のついたものであるがゆえに、その表象をめぐる女性の欲望について語る事が難しい。スーザン・ソントグは、男性が女性よりはるかに年上のカップルが当然のものや好ましいものと認識される背景には、加齢に伴う身体的変化によって女性については美しさや性的魅力が失われ価値が下がるとみなされるのに対し、男性はそうにみなされないといった、加齢に関する二重基準が存在すると論じる (Sontag, 1977, pp. 286-287, pp. 292-293)。夫より妻が年下であるべきとする慣習において、女性は御しやすく未熟な存在であることが理想とされる (Sontag, 1977, p. 293)。ソントグは、こうした認識は男性主導の不平等なシステムだけでなく、このミソジニーな価値観を女性も内面化することによって機能していると、女性の共犯関係を指摘する (Sontag, 1977, pp. 293-294)。中年・初老の男性と若い女性が結ばれる物語は、ソントグが言うようにミソジニーな価値観を女性たちが内面化していることの表れなのだろうか。しかし、20代後半の女性と50代の男性の恋愛を描いたヤマシタトモコの『Love,Hate,Love.』を読んだ三浦しをんが、「この作品はとてもとときめく」と言いつつ、直後に「私は現実では、年の若い子と付き合うおじさんは嫌いなのに」と続け (ヤマシタ・三浦, 2015, p. 28)、それに対してヤマシタが「お言葉に目からウロコがぼろぼろ落ち」、「でも二次元だと萌え」という共通の見解に落ち着いてしまったという対談と『Love,Hate,Love.』のあとがきに書かれたエピソードからは、ミソジニーな価値観の内面化といった理解では十分に説明できない様子が見えてくる。

こうしたジェンダーに関する問題を含みうるジャンルを女性が楽しむことをどのように考えるかという研究は、さかのほれば1980年代前後より蓄積されてきた性暴力や家父長制が描かれる女性向け大衆娯楽の分析に至る (Radway, 1984; Snitow, 1979)。日本のポピュラー文化については、近年女性向けポルノを見ることやBLを読んだり書いたりすることやアイドルを推すことなどの側面から蓄積されてきた (守, 2010; 堀, 2009; 香月ほか, 2022; 田中, 2024)。本稿は、特に女性向けポルノグラフィの研究視座を参照して、女性向けマンガにおける年上の男性と年下の女性によって構成される「年の差」恋愛の表象に描かれる欲望を検討するものである。

楠本まきが集英社の『Cocohana』に連載した『赤白つるばみ・裏』には、漫画家の谷崎が「ジェンダーバイアスのかかった作品」は「全滅するといい」と語る様子が描かれる (楠本, 2020a, p. 104)。それは社会的な悪を描かないということではなく、それが問題あるものだと「意識的に向き合い」ながら創作する必要があるという指摘だ (楠本, 2020b, p. 74)。同様にヤマシタも、強引なロマンスを読んだり描いたりしたいという気持ちは否定できないが、描き手が暴力に自覚的になり、暴力的ではない描き方を工夫することが大切だと述べる (ヤマシタ・岩川, 2020, p. 65)。消費者としての読者も無関係ではいられない。コンテンツを楽しむことによって生まれた受容が規範的な物語の再生産を促し、その物語が内包する価値観が現実の暴力を強化するのではないかという思いの間で、女オタクが気まづい問題に直面することが指摘される (田中, 2024, pp. 236-237)。本稿は、「年の差」ジャンルとミソジニーな価値観との間のファンタジーとリアリティのせめぎ合いの様相の記述を試みる。

2 「年の差」ジャンルと「リアル」との距離感

「少女マンガは、もっともその時代の女性の価値観を敏感に映しだしてきた分野」とされる (藤本, 2008, p. 24)。それは、幻想をつくと同時に「何か共有された感覚」をもたらすものでもあり (藤本, 2008, p. 8, pp. 22-24)、特にヤングレディースというジャンルにおいてその「共感」は二種類に大別される (岡本, 2015, p. 143)。「読者の現実と重なりあう、あるいは読者の実生活に還元できる、リアルな〈共感〉と、読者の現実と切り離されているからこそ安心して耽溺

できるような、フィクショナルな〈共感〉」である（岡本, 2015, p. 143）。前者は「『いまここ』にいる自分の感覚・感情に寄り添うような物語」であり、後者は「『ここではないどこか』に連れ出された自分が、現実世界の諸制約を無視して首肯・肯定したいと思える物語」と説明される（岡本, 2015, p. 143）。

先述した「現実では、年の若い子と付き合いおじさんは嫌い」だが、「二次元だと萌え」という『Love,Hate,Love』のあとがきに書かれる感覚は、後者の「共感」に近いように見えるかもしれないが、後者の「共感」の例として挙げられるのが『ハッピー・マニア』で理想の恋愛を求めるシゲカヨに対する共感であり、「現実の諸制約」とは二年間で14人の男性と出会い二度不倫をして9回職を変えるというめまぐるしい変化と非現実的な仕事と恋愛の配分といった問題を意味することと比べると（岡本, 2015, p. 143）、ミソジニアな価値観といった暴力との関係は、現実との間の別様の説明を必要としているように思われる。

というのも、2000年代以降というのは、セクシュアル・ハラスメントへの認識が定着したり、SNS上でもしばしば若い女性と関係をもとうとする男性に対する嫌悪感が話題にあがる時代であるからだ。国立社会保障・人口問題研究所による2015年の出生動向基本調査のデータを用いた分析によれば、結婚相手との間に7歳以上の年齢差を理想とする女性は6%に過ぎないのに対して男性は22%を占め、特に男性の希望結婚年齢が上がるほどその傾向は強くなる（Ghaznavi et al., 2022, pp. 10-11）。このような若い女性との交際や結婚を理想とする男性の社会的傾向の中で、女性向けのマンガでも若い女性との交際を望む男性の欲望が含みうる気持ち悪さが描かれる。小学館『プチコミック』系列で連載された尾崎衣良の『深夜のダメ恋図鑑』（2013～2022）では、部下に25歳の女性を紹介させる45歳の男性や、親戚の集まりの中で25歳の女性を「ババア」扱いし、22歳以下の女性と付き合いたいと口にする40歳の男性が気持ち悪い男として成敗される（1巻）¹。彼らの気持ち悪さとは、前者は「ボクチン非処女はキライッ」という発言で表現される処女性の信仰や（1巻）、後者を批判して「相手するなら若い子のほうが絶対いいですよ」「だって／そのほうがバカがバレなくて済みますもんね／若い子相手ならあさ～～～い知識しなくても　なんかエラそうにできま

¹ 本稿では、複数巻あるマンガからの引用情報を（巻号、ある場合はページ番号）の形式で示す。

すしね?」と女性が言語化するような(1巻)、優位な立場で支配したいという願望、そして両者に見られる、自らの加齢は棚上げする一方で年を重ねた女性は価値がないものとみなし、自分にふさわしいのは20歳ほど若い女性と考える加齢に関する二重基準である。女性にのみ厳しく貞操を求める性の二重基準や、優位な立場から相手を支配したいという欲望も、家父長制を支えるミソジニーの表れである(上野, 2018, pp. 47-58, p. 174, pp. 277-278)。この現実には若い女性と交際を望む中年男性の欲望と家父長制的価値観の親和性に対する認識の中で、現実の関係性に対する忌避の感情との折り合いはどのようにつけられるのだろうか。その検討には女性向けポルノグラフィに関する研究の知見が役に立つかもしれない。

女性向けのポルノグラフィマンガには、女性が恐怖を感じずに楽しめるような工夫がされている(守, 2010, pp. 110-124)。それは例えば、レイプファンタジーを扱う際に、「絶対に現実には起こってはいけない」といったコメントが補足されることや、あるいはマンガという形式によって生身の人間の身体から切り離すといった方法である(守, 1999, p. 177)。そして、このマンガという形式において、登場人物が会話する声ではない「内面のモノローグ」²という、「マンガの主となる登場人物の音声化されない心情を言葉によってコマの内部に書き込む手法」が多用される(守, 2010, p. 141)。この内面のモノローグにおいて、行為の最中や行為に至るまでや事後の女性の心情が補足されたり、男性側の愛情が描かれることによって、それが一方的な暴力行為で女性が傷つけられたという物語ではないことが示される(守, 2010, pp. 144-148)。そうした表現を通じて、「女性の側からの意味付け」を徹底的に描くと同時に、「ポルノグラフィに描かれるセクシュアル・ファンタジーを、現実世界に属するものではなくあくまでも幻想世界にとどめようとする」のである(守, 1999, p. 176)。

ポルノグラフィは女性に対する暴力を描くと単純な社会還元的視座から批判されることに対して、「現実ではなく幻想だという前提の下で議論を進め」(守, 1999, p. 179)、ポルノグラフィに現れる「特定の構造が持つ意味を読み解」き、「現実と関係を持つ別種のReality」として、ポルノグラフィが「現実とどのよう

² 本稿では、内面のモノローグを山かっこくを用いて引用する。

に關係しているのか」考察すべきという主張がされる（堀，2009，pp. 28-29）。そのような営みによって、女性たちが魅了され享受してきた恋愛の物語や女性が主体的に選択した欲望とその事実を、家父長制的な性規範の「証拠」としてではなく検討することが可能になる（堀，2009，p. 41）。

ポルノグラフィ同様、女性向けマンガに描かれる現実では好ましくないアプローチや関係性も、従来の「共感」を基盤とした読みから、幻想の物語として楽しめるものという視点から検討することが妥当ではないだろうか。以下、第3節ではヒロインと結ばれる中年・初老の男性像とはどのような人物であるのか外見のデザインの点から検討し、第4節では女性向けポルノグラフィの幻想とリアリティに関する知見を踏まえつつ、「年の差」ジャンル特有のコードを分析することで作品に描かれる欲望を検討する。

ヒロインと中年や初老の男性が結ばれる物語はおよそ2000年代末からメジャーとなる。西炯子の『甥の一生』（2008～2010）やヤマシタトモコの『Love,Hate,Love.』（2009）、おかざき真里の『&』（2010～2014）をはじめ、20代や30代の女性ヒロインと40代から60代の男性が結ばれる作品が複数描かれ、2011年にはマンガ配信サイトのコミックシーモアで「オヤジ」と20代や30代の女性の恋愛に特化して扱う雑誌『オヤジズム』が創刊された。ジャンル成立の背景を特定することは困難だが、BL誌上でも、2010年代以降、外見上中年男性とわかるキャラクターが年齢差カップルの物語の中で増え、そのエポックメイキングな作品としてヤマシタトモコの『くいもの処 明楽』（2007）が挙げられることを踏まえると（堀・守，2020，p. 67）、ジャンルを超えて女性向けマンガで登場した表象と理解できる。若いヒロインと中年・初老の男性の恋愛の物語のヤングレディーズ誌での連載のピークは2010年代半ば頃までだが³、その後、TL（ティーンズラブ）⁴という恋愛をテーマとした少女マンガに性描写が含まれる作品（堀，2009，

³ ただし、集英社『Cocohana』で連載された八神星子の『熟×彼』（2022～2023）をはじめ今日までジャンルとしては存続している。

⁴ 1970年代末に登場した少女マンガを卒業した年齢層の女性を対象とした「大人の恋愛」を描くレディーズコミックが、その後、性描写に重点を置かないヤングレディーズと過激な性描写を扱うレディコミに分かれた（堀，2009，pp. 73-74，pp. 106-110）。TLは1990年代後半から2000年代初頭に成立したレディコミより若年層を対象としたジャンルで、絵柄は少女マンガのトレンドと近似性を持ち、性描写はレディコミのようなハードなものではない（堀，2009，pp. 106-110）。

p. 74) で2020年代まで描かれ、ドラマ化⁵もされている。こうした背景を踏まえ、本稿では主に2000年代後半以降の作品に描かれるヒロインと結ばれる中年や初老の男性像を検討する。

3 外見と年齢

少女マンガの男性像について、1960年代以来常に容姿のよさを前提にしていたのに対して、1970年代のウーマン・リブの興隆と1986年の男女雇用機会均等法の施行を背景に女性の社会進出が進み、ライフスタイルの選択肢が増えたことで、「白馬に乗った王子様」が「唯一の正解」という制約を受けなくなった結果、イケメン像が多様になったと指摘される（岡本, 2015, pp. 119-125）。「日本人離れした」イケメンが減り、「読者の生活圏内にいそうな、手の届く存在に」なる（岡本, 2015, p. 129）。年をとったイケメンはこうしたイケメン像の変遷の中に位置づけられる（岡本, 2015, p. 129）。そして、イケメンの幅が広がったと言っても、そこには「最低限の「イケメンのコード」が存在する」（岡本, 2015, p. 128）。それは、「彫りの深さ、鼻の高さ、目の大きさ」などに関する「アングロサクソン系を下敷き」としたものであり、「かつての少女マンガが重用した「白色人種の王子様」の系譜上にある人物像である（岡本, 2015, p. 128）。とはいえ、これは中年や初老の男性像に特化した議論ではない。本節ではヒロインと結ばれる中年や初老の男性の姿をより詳しく検討したい。

3-1 例外的な優れた容姿

若い女性と中年男性の恋愛を描いた作品の先駆けとして、2004年から2009年に講談社『Kiss』で連載されたひうらさとの『ホタルノヒカリ』が挙げられる。27歳の雨宮螢は会社の後輩との交際を経て最終的に41歳の高野誠一と結ばれる。雨宮は高野を「40男」「オヤジ」「クソオヤジ」「オッサン」と表現し（1巻, pp. 16-20）、高野も自身を「オヤジ」（1巻, p. 41）と言い、高野が中年男性であることが強調される。しかし、高野は顔や首にシワがなく髪も黒くスタイルもよく、設定こそ中年だが20代のキャラクターと比べても外見上の老いがほとんど

⁵ 例えば、本稿3-2で扱う作品はどれも2020年から2023年にかけてテレビドラマ化されている。

ど描かれない。その後、主に2000年代後半から2010年代に大手出版社のレーベルに掲載される作品群では年齢が明確に外見に反映される。

小学館の『月刊フラワーズ』で2008年から2010年に連載された西炯子の『甥の一生』で30代半ば過ぎの堂蘭つぐみと結ばれる51歳の海江田醇には顔や首筋にシワが描かれ、あばらの出た筋肉のない体型といった明確に外見上の老いが描かれている。同様に、祥伝社の『FEEL YOUNG』で2009年に発表されたヤマシタトモコの『Love,Hate,Love.』のバレエ教室で教える28歳の江宮貴和子と結ばれる52歳の縫原桂介も、やせ型で首周りのシワとこけた頬と頬骨の凹凸や眉間やこめかみのシワが描かれる。縫原が「——あなたの知ってる男にはくは大きく見劣りするだろうな」と、江宮の前で裸になることで自身が「傷つく可能性が怖くな」り交際をやめようかと口にするように、縫原は江宮と同世代の男性と自身の体型を比較し、自身の老いた身体に自信をもてない。同じく『FEEL YOUNG』で連載されたおかざき真里の『&』(2010～2014)で26歳の医療事務とネイリストをかけもちする青木薫と交際し別れる矢飼黄河45歳もやせ型で頬骨の凹凸とこけた頬や無精ひげが描かれる。矢飼の同僚で矢飼よりも若い赤坂や青木の後輩で青木を取り合う城田孟司の髪が黒く塗られることと比べると、白で描かれる矢飼の髪は白髪を思わせる。青木から服を脱ぐよう乞われた際に「ダメ」と断り、〈40も後半になってそんなにホイホイ脱げるかよ／いろいろと／中学の頃とは／いろいろと違うぜ [自転車を] 2人乗りしても!〉とその心情が描かれるように(2巻)、矢飼は身体の老化を気にして、20代の青木の前に身体を晒すことを避ける。矢飼の身体は、やせ型で大胸筋のなごりも描かれるがあばらが浮き出ている(5巻)。講談社の『Kiss』で連載されたアキヤマ香の『長閑の庭』(2014～2019)で、大学院生で23歳の朝比奈元子と結ばれる指導教官の榎郁夫64歳は、頬がこけ、目の周りのシワが年齢を表しており、ほうれい線が描かれ、榎が若いときのデザインと対比しても首から顔が全体的に筋張っている。合宿のときに足を滑らせて海に落ちた朝比奈を助けに34歳の田中が迷わず海に飛び込んだのに対して、「田中くんの機敏さに自分の歳を感じ——／情けない気持ちになった」と語るように、自分より30歳ほど年下の田中の若い身体と比較して、榎は老いた自身の身体に劣等感を抱いている(2巻, p. 101)。田中の腹筋は割れている(2巻, p. 46)。

総括すれば、こうした人物は、肉が落ちこけた頬やはっきりと描かれる顔や首筋のシワ、筋肉のない体型によって老いが描かれる。「よく漫画に登場する「なんちゃっておじさん（自称おじさんの割に、若くてかっこいい）」とかじゃなくて、本当におじさん」と評される縫原をはじめ（ヤマシタ・三浦, 2015, p. 28）、従来の人物像と比べ彼らは視覚的に明確に老いている。顔や首にシワが描かれ筋肉質でなく、時に体型に自信がない様子からは彼らが自らの老いを自覚する人物であることがわかる。

とはいえ、彼らもモブキャラの中年男性とは明らかに異なる容姿をもつ。例えば、『甥の一生』の海江田の同級生は髪が後退し額が広く、バーコードヘアの人物もいる（2巻, p. 170）。さらに、同級生は中年太りで二重顎や頬肉が盛り上がっていたり喉ぼとけが極端に出ており、海江田の直線的なキリとした眉に対して彼らは短く薄くなった眉や垂れさがった眉をし、鼻筋の通った海江田に対して鼻が丸かったり大きかったりするなど、明らかに造形が異なる（2巻, p. 170）。それを見てつぐみが〈……そうか 52ってそういう年だな／…あんまり年齢のことを意識したことなかったけど…世の52にくらべたらずいぶん……?〉と考えるように（2巻, p. 170）、海江田は同世代の人と比べて年齢を感じさせない、若く優れた容姿をもっている。『Love,Hate,Love.』の縫原も、江宮のアルバイト先のバーのマスターが無精ひげを生やし丸みを帯びた体型で眉が下がり鼻筋がはっきりと描かれぬのに比べると、明らかにすっきりと整った顔をしている。江宮が〈顔がスキ〉と思う様子も縫原の顔が優れていることを想像させる。『長閑の庭』の榎も、同僚はさがり眉で鼻は省略されて描かれず（4巻, p. 22）、生え際が後退し腹も出ているのに比べると（4巻, p. 151）、鼻筋や眉が整っており、一卷の冒頭で朝比奈が〈のびた背筋〉と説明するように背筋も伸びている（1巻, p. 3）。すなわち、彼らは総じて他の中年や初老の男性とは眉や鼻の形や体型などの点で明らかに異なる容姿で描かれている。

少女マンガに描かれる男性の身体の変遷をたどれば、西谷祥子や水野英子、そして手塚治虫の『リボンの騎士』に見られるような「線の細い、夢幻のような」肉体のない王子様からはじまる（藤本, 1999, p. 24）。それは「女性が男装したような、スマートでヒゲも生えず汗もかかないような、性のないような存在」である（萩尾, 2021, p. 123）。その後、岸裕子の『玉三郎恋の狂想曲』や名香智子の

『花の美女姫』、そして木原敏江の『摩利と新吾』の前身となる『あ〜ら わが殿!』といった1970年代前半の作品になってはじめて男性の身体が性的に対象化される(藤本, 1999, pp. 24-25)。池田理代子の『ベルサイユのばら』の美少年アンドレには大胸筋が描かれる(藤本, 1999, p. 25)。1980年代からセックス描写を当たり前前に描くレディースコミックが登場するが、少女マンガの男性身体の表象にさほど変化は訪れず(藤本, 1999, p. 27)、彼らの身体は、筋肉が描かれつつもボディビルダーのようなリアルな骨格や筋肉が描かれるのではなく、どこか中性的な肉体として描かれる(藤本, 1999, pp. 26-27)。

外見上の老いが描かれる男性たちも、モブキャラの男性と比較すると、少女マンガのいわゆる王子様がもつ外見と身体に近い容貌をもつ。老いが描かれる男性たちの加齢に伴う筋肉のない身体は、より男性性をどこかそぞおとされた存在として描かれる。『婿の一生』の著者の西炯子は、耽美を特徴とする『JUNE』で連載された「ケーコタンのお絵描き教室」という竹宮恵子が一般読者の絵を講評する企画に毎号投稿し、絵を学んだ(倉持, 2020)。そのような西に描かれる海江田をはじめ、中年・初老の男性はどこか中性的な存在であり、現実の男性の加齢との切り離しを可能にする。

3-2 記号としての年齢

他方で、2010年代末から、主にマンガ配信サイトで電子コミックとして発売された作品群では、年齢自体は中年と位置づけられながらも、実質的に非常に若い外見をもった人物が多くを占める。forcsの『Fizz』で連載されたさんずい尺の『全力で、愛していいかな?』(2020~2023)で篁千世30歳と結ばれる瀬尾一愛45歳や、めっちゃコミックの『G★Girls』で連載された中間淳生の『年の差婚』(2018~2021)で村上舞衣子29歳と結ばれる花里晴海44歳は、設定こそ40代半ばで、瀬尾は篁に「オジさん」世代と表現され(1巻, pp. 1-2)、花里は舞衣子のはとこの理音から「中年」「初老」「おっさん」と表現されるが(2巻)、実際のところ彼らの加齢を示す徴は、鼻根と目頭の間に描かれた一本の直線的なシワのみであって、肌や輪郭については加齢が描かれない。マンガよもんがで連載された志茂の『部長と社畜の恋はもどかしい』(2019~2024)で20代後半の丸山真由美と結ばれる提司治にいたっては30代後半だがシワもない。同作で23歳の三森

と結ばれる諫山41歳もこけた頬によって年齢が描かれるがシワはない。コミックシーモアの『オヤジズム』で連載された『家政夫のナギサさん』（2016～2017, 2020）は、ドラマ化に伴う2020年の再連載では老いが明確に描かれるようになるが、当初の連載では、20代後半の相原メイと結ばれる46歳の鳴野ナギサの老いは、主に眉間と目の下から頬にかけてのシワによって描かれ、ほうれい線や頬のこけはしばしば消える。

そうした彼らは身体的にも筋肉質だ。『家政夫のナギサさん』を除いて、ここで挙げた作品は性描写を含むTL作品である。老いが明確に描かれる作品の男性たちがどこか中性的な身体をしているのとは異なり、行為に当たり露わになる彼らの上半身には、総じて大胸筋や腹筋が描かれる。顔や首に年齢があまり描き込まれない彼らは、身体には外見的な老いが全く描かれぬ。彼らにとって老いと単なる設定にすぎず外見には反映されない。たいてい彼らは背が高く、体臭（加齢臭）がないどころかよい匂いさえする。『部長と社畜の恋はもどかしい』で三森が諫山を意識するきっかけは、〈めっちゃいいにおいがした〉からであり（3巻, p. 146）、エレベーターで一緒になった際も〈やっぱり諫山さんいい匂い…〉と繰り返されることで（4巻, p. 20）、諫山が見た目はもちろん体臭においても加齢に伴う問題とは無関係な人物であることが強調される。

3-3 「老い」の実際

このように、身体をめぐる様々な角度から他の中年や初老の男性と描き分けられる彼らには、さらに社会的地位や高い仕事能力と順調な出世、そしてそれらに伴う安定した収入が約束されている。『全力で、愛していいかな?』の瀬尾は副社長で、『&』の矢飼は医師で、『甥の一生』の海江田と『Love,Hate,Love.』の縫原と『長閑の庭』の榎は大学教授で、『部長と社畜の恋はもどかしい』の提司と諫山はそれぞれ大企業の管理職で、『家政夫のナギサさん』のナギサも、もとは大手製薬会社のMRで、自ら家事代行業に転職したのちも仕事能力が高く評価される様子が描かれる。その上、手際よく家事を行ったり、ヒロインのよき相談相手となる様子は、イケメンの定義が拡大したり、「三高」からより日常的な存在へと理想が変化する時代にあって、いわゆるBLや少女マンガに描かれる理想的で非のうちどころのない男性、スーパーダーリン、「スパダリ」のよう

ある。実際、『部長と社畜の恋はもどかしい』で丸山は、仕事の相談にのり、料理もでき、包容力も性的な魅力もある提司に、「治さんって本当に私のスーパーダーリンですね」（2巻, p. 151）と口にする。このように、設定は中年でも外見に老いが描かれない提司がわかりやすくスパダリとされるのに対して、老いを外見に描き込まれる人物は、その外見上の老いをもってスパダリというキャラクターの都合の良さや秀でた理想としての姿を、より身近な存在であるかのように錯覚させる効果をもつかもしれない。

ヤマシタは縫原を年上に設定した理由を「対抗意識や攻撃性のない」「優しい男の人と設定するため」に必要な条件だったと語る（ヤマシタ・山本, 2024, p. 195）。「無条件に優しい男の人を出すと、「こんな人いない」になってしまうし、いるとして描くなら何かしらの」「裏付けがないと架空の存在がすぎるかな」という気がしたのに加えて、「あまり夢物語すぎないロマンスを描くときに、ただただ無条件に優しい男性を説得力を持って描けるかといわれると、それはとても難しいことのように感じた」ことから（ヤマシタ, 2024, pp. 195-196）、夢物語ではないけれど、でもいてほしい優しい男性像を描くために、縫原は中年の男性となった。彼らの身体に描き込まれる老いは、もはや優しい理想的な人物を夢物語から現実にいるかもしれない人物へと日常に近づけるための方法であり、現実の中年や初老の男性とは別の人物である。そうであるにも拘わらず、老いが外見上に描かれていることで、あたかもリアルな人物であるかのように錯覚させるこれらのキャラクターは、現実の自らの加齢を脇に置いて若い女性との交際を望む中年や初老の男性を暗黙裡に物語から締め出すことを可能にし、読者が物語にスムーズに耽溺することを可能にする。

4 暴力のリアリティを消す手法

外見に老いを描かれない人物はもちろん、外見に老いが描かれる人物も、一見リアルであるかのような老いは実際には加齢一般と切り離されており、むしろ彼らが都合のよい理想的な人物であることを無理なくリアルに演出するための一つの手段だった。では、セクシュアル・ハラスメントや性暴力に該当し得るようなアプローチや関係性、あるいは若い女性との交際を希望する男性の欲望と親和性の高い家父長制的価値観については、どのように幻想とリアリティを交渉させる

のだろうか。結論を先取りしてしまえば、それには内面のモノローグを通じた再意味付けといった女性向けポルノグラフィと似たような手法が用いられている。とはいえ、それに終始するものではなく、少女マンガに定番のコードを踏襲しながら、「年の差」恋愛ジャンルのコードとも言えるかもしれないものが存在する。本節では、若い女性と中年や初老の男性によって構成される恋愛のストーリーに通底する幻想のコードを見ながら暴力との交渉を検討する。

4-1 内面のモノローグ

まずは、内面のモノローグを通じた物語化である。小学館『プチコミック』で連載されているみつきかこの『ラブファントム』（2014～）のヒロイン23歳の平沢百々子と38歳の長谷慧の関係は、両者の勤務先のホテルの空中展望台で出会った際に、突然長谷が平沢にキスをしたことからはじまる（1巻, p. 18）。同意なく突然キスするのは暴力であるし、ホテルのテナントのカフェの店員の平沢とホテルで働くエリート社員の長谷は、直接の上司部下関係ではないが長谷が優位な立場にいる。しかし、その行為に続くのが、頬を赤らめた平沢が、〈何？／唇／軽く触れただけなのに〉、〈凍りそうに寒い／なのに———／けてしまいそう〉と、平沢にとって驚いた経験ではあったが嫌な経験ではなく、むしろ恋に落ちる経験と感ずる様子が内面のモノローグを使って描かれ、翌日も〈信じられない／あんな自分がいたなんて…！〉、〈…あの人の最初のキスで何かがぶっ飛んじゃった感じ……………〉と、やはり長谷の行為は不本意ではなく快樂の経験として描かれる（1巻, pp. 18-23）。翌日、今度は平沢から長谷にキスをし、「キスを…もっと…したくて———」という言葉に続くように（1巻, pp. 36-38）、内面のモノローグを通じて、平沢にとって見ず知らずの長谷からの突然のキスは暴力ではなく快樂の経験であり、望ましいものであることが繰り返し示される。同意のないキスがヒロインの内面のモノローグによって恋に落ちる瞬間へと意味付けられることで、暴力ではなく恋のはじまりとなる。さらに、長谷に突然キスされたことを平沢が「人生トップ3に入るやらかし」（1巻, p. 24）と表現しており、優位な地位にいる相手の行為ではなく自身の行為として理解している様子が描かれる。このように、女性向けポルノグラフィと共通する内面のモノローグを通じた出来事の再意味付けは暴力のリアリティを消す一つの手段と

なっている。

4-2 脱性化

続いて、「年の差」ジャンル特有のコードである。まず挙げたいのは脱性化した男性像である。年の離れた女性との交際を理想とする男性の欲望に沿うようなマーケティング系の恋愛解説本は（大屋, 2009; 諸富, 2011）、中年男性の魅力を「草食系」の若い男性と比較して性に積極的で性欲旺盛である点から語る。しかし、作品にはむしろ脱性化した存在としてヒロインに認識されていたり、男性自身が自らの性機能の低下を口にする様子が描かれる。

『家政夫のナギサさん』は、帰宅したメイが玄関のドアを開けた際に〈知らない男がブラジャーを持って立っていた〉という場面からはじまり、それに対してメイは叫び声をあげる（1巻, p. 5）⁶。メイの家事能力の低さを心配して家政夫を契約したことを妹のユイが告げると、「嫌よ！絶対嫌!!」「男の人なんて下着とか色々問題あるじゃない」とメイは拒絶し、それに対するナギサの「70B [のブラジャー] を見ても特に思うところはないです」という発言に、メイが青ざめた顔で言葉を絶して衝撃を受ける様子が描かれる（1巻, p. 7）。業務過程で下着に触れることがあっても事前に許可をとり必要最低限にすべきであり、バストサイズを把握し口にすることは程度を超えている。そうしたナギサの言動に対して、メイが叫び声をあげ絶句することからは、それが不適切な言動と作品内でも認識されていることが示される。このブラジャーをめぐるやりとりはナギサがメイに好意を告げる場面で繰り返される。「最初は確かに興味がなかったんですが／困ったことに最近意識してしまうようになって」「70Bの話です」というナギサの発言に、メイは〈!? !?〉と再び驚くがそれは赤面する反応であり、続いてナギサが「親子ではなく／ただの男女の間でも／「お母さん」と呼ぶ関係はあったな」と言うのに対して（1巻, p. 204）、「じゃあその私達／…結婚しますか」とメイは口にする（2巻）。なぜ、同じようにブラジャーのサイズに言及することが今度は結婚の話に至るのだろうか。その理由としてナギサが脱性化された存在としてメイに認識されていくことが推測される。下着を洗濯ネットに入れて出すように

⁶ 『家政夫のナギサさん』は書籍の出版が1巻のみであるため、1巻は書籍から、2巻はKindle版から引用する。

頼むナギサに対して、どうせナギサがやってくれるだろうと答えるメイの姿には(2巻)、メイがナギサを性的な存在として認識していない様子が見られる。また、メイはナギサを「お母さん」と認識するようになるが(1巻, p. 88)、女性をめぐる性の二重基準において「母」とはまさしく脱性化された存在である。そうであるからこそ、ナギサとの結婚を報告した際のユイの「帰って掃除と無駄毛処理しな!」という言葉に、「……毛／無駄毛処理が…必要なシーンって…／果たして来るんですか…／ね…」と、性行為をする可能性があることに驚き、またナギサからの将来子どもを望むかどうか話し合わなくてはいけないという言葉に、硬直し〈…いや待って／子供ってことは作る過程もあるってことで／待って待って男の人って何歳くらいまで生殖能力あるの?／そもそもナギサさんって／本当にそういうことを／したいって思っているの?私と?〉と、性行為の可能性を考え赤面しパニックする反応になる(2巻)。

こうした、ヒロインの想像が性的なことにまで及んでいない様子は『長閑の庭』でも描かれる。カフェで目の前に座るカップルがキスをする様子を見て、朝比奈は〈だったら私は…教授とああなりたいたのかしら…〉と想像し、〈ひゃああああ〉〈たっ確かになりたくないわけじゃない(触れたいと思うくらいだから)／でもでもキスとか!キスとか!!／待って!!キス　そしてそれ以上のひゃあああなことは“恋”なの!? “欲情”というのでは!?　ならば“恋”ではない!?〉と、榊とのキスや性行為を想像してパニックになる(4巻, pp. 11-13)。グリム童話を研究している朝比奈はしばしばグリム童話を参照しながら恋愛を考える。グリム兄弟がメルヒェンから性的な描写を削ったように(タートル, 1990)、朝比奈から榊への感情に関して、性的なことがらはほとんど描かれず、朝比奈と榊の関係性における身体の接触は手の接触に集約され、抱き合いキスする場面は一度描かれるが(7巻, pp. 148-155)、性行為はその行為の存在を示唆するような描写もない。むしろ、榊との交際を朝比奈に打ち明けられた同級生の富岡樹里が〈うーんなんか想像したくない…　つかどーなのこの年の差!!〉と(6巻, p. 152)、榊と朝比奈の性行為を想像して気持ち悪くなる様子が描かれるように、二人の性行為は想像すらも忌避される。

先述したように、設定として中年であっても外見に老いが描かれない作品には性描写が描かれるのに対して、男性の外見に老いが描かれる作品では性行為がほ

とんど描かれなかったり、『&』の矢飼のように行為に際しては着衣の状態で描かれたりする様子は、若い身体と老いた身体の性行為を視覚から消し去る。特に、『家政夫のナギサさん』の仕事を紹介したはずの関係性や『長閑の庭』の教員学生間という実社会であればセクシュアル・ハラスメントと親和性の高い関係性においては、性行為の可能性すらも周到に取り除かれている。

さらに、性行為の描写を含む作品でも性欲旺盛とは言い難い様子が描かれる。『甥の一生』で海江田が、行為より先に食事をとろうとするつぐみに、「…キミはわかってへんな メシなんかあとやろ 50越えた男を30代と同じやと思うなよ」、「もうなあ一回一回が大事なんや ぞ」と言う描写や（2巻, p. 45）、『&』の矢飼が行為後に「すみません2回目もないですから／年だからごめんね」と言う描写からは（4巻）、加齢に伴う性機能の低下を自覚する様子が見られる。彼らの様子は、中性的なデザインによって現実の中年や初老の男性の身体と切り離すだけでなく、女性の価値を若さに見出し、いつまでも若い女性にモテる強い男であることを証明するためにバイアグラで性欲を維持するような「気持ち悪」い男性像（田中, 2015, pp. 73-78）との切り離しを可能にする。

4-3 女性の選択と主体化

最後に、「年の差」恋愛を描くコードとして無視できないのが選択を通じた女性の主体化である。ほとんどの少女マンガに共通することとして、ヒロインが最低でも二人の男から愛される設定がある（横森, 1999, pp. 29-31）。二人の男は、髪の色や髪型、性格や生き方など多くの点で対照的であり、しかし、どちらに転んでも大丈夫なように設定されている（横森, 1999, p. 31）。若い女性と中年・初老の男性の恋愛を描く作品には必ずと言っていいほど、中年・初老の男性とヒロインを取りあうヒロインと同世代や年下などのより年齢の近い男性が描かれる。『甥の一生』のつぐみの元同僚の中川、『Love,Hate,Love.』の江宮のパレエ仲間寿、『長閑の庭』の助手の田中、『&』の青木の大学の後輩の城田猛司、『ラブファントム』の平沢の後輩の相良淳平、『全力で、愛していいかな?』の筐の職場の元上司の紅山、『年の差婚』の舞衣子の年下のはこの理音、『部長と社畜の恋はもどかしい』の丸山の同期の拜島や三森の同期の草野などである。妻子持ちの中川や、職務上の関係性を利用して無理やり迫り、断られたら悪い噂を流す紅

山など有害な人物もいるが、多くの場合は、少女マンガのお約束事を踏襲し、当初はヒロインにアプローチしつつも、最終的に身を引き、ヒロインが中年・初老の男性と交際することを応援する。中川や紅山との対比の中で海江田や瀬尾との交際が幸せに見えることは言うまでもないが、同世代と付き合う可能性もあったヒロインがそれを断り、中年・初老の男性との交際を選ぶという行為は、彼女たちの交際を主体的なものとして演出する。

まずは有害な人物との対比において、中年・初老の男性が正しい交際相手に見えるパターンについてである。『甥の一生』の妻子持ちで離婚を匂わせてつぐみを不倫相手にする中川に比べたら、独身で浮いた話もなく好意を隠さず結婚を申し込む海江田との交際は、つぐみの友人や母が好意的にとらえるようにわかりやすく好ましい（1巻, pp. 96-97, pp. 177-183）。また、『全力で、愛していいかな』で紅山との対比は、権力の非対称性について瀬尾一花が誠実に向き合う人物である様子を演出する。デザイン部に憧れていた篁千世は、デザイン企画部部長の紅山と仕事上の付き合いを続けていたが、紅山に強引にホテルに連れ込まれそうになる（1巻, pp. 151-153）。篁がそれを断った結果、紅山は会社中に篁からしつこくアプローチがあって困ったという噂を広める（1巻, pp. 153-154; 2巻, pp. 4-7）。対して、そもそも篁と瀬尾は職務上の関係はないだけでなく、作品には瀬尾が年上で裕福で副社長という社会的地位もあることを反省する場面がしばしば描かれる。瀬尾の告白に返事をしたその日のうちに性行為をすることになった出来事を、「[紅山と] …同じようなこと避けたかった」と振り返る瀬尾に、瀬尾の友人は、「もしかして一愛ちゃんに付度したんじゃない？」（1巻, pp. 96-97）と指摘する。それは、ホテルのレストランでのディナーデートに際して篁にワンピースを買い与えたり、そのレストランの朝食がおいしいと話題をふる瀬尾の行動が、高価な贈り物と宿泊を含むデートを予定しているかのように受け取られ、篁にプレッシャーを与えたのではないかという指摘だ。指摘を受けた瀬尾は、「か…仮にそういう思いをさせたのなら／もう二度と千世ちゃんに強いるような負担を絶対にかけない！」と反省する（1巻, p. 99）。さらに、二度目の性行為の後、再び行為を強いてしまったかもしれないと相談する瀬尾に対し、「僕らみたいなオッさんたちが君らのベッド事情をアレコレ話し合うのってさ／千世ちゃんからしたらか・な・りっ気分が悪くなるんじゃない

いかな？」と、プライベートなことを許可なく他言することの問題性を友人がたしなめ、瀬尾が反省する様子が描かれる（1巻, pp. 132-134）。根も葉もないうわさを流し筆を追い込む紅山との対比において、学習し反省する瀬尾は誠実な存在として演出される。ヒロインと同世代のどうしようもない男性と対照的に描かれることで、中年や初老の男性との交際が好ましいものとして可視化される。

続いて、同世代からのアプローチを断り中年・初老の男性との交際を選択することが、ヒロインの主体性の発露へと繋がることについてである。『長閑の庭』の朝比奈は常に他人の顔色をうかがい、決断を他人にゆだねる。朝比奈は榊に対する自分の感情を恋であるのかそうではないのか悩み続ける。榊からの師弟愛だという言葉や（2巻, pp. 137-139）、榊の元妻の朝霧による朝比奈の感情は恋であるがそれは自分勝手なものだという指摘（4巻, p. 32）、あるいは、母親の「無意識に素敵フィルターかけてない？／そもそも若い教え子に手を出す様な 理性に欠けた人じゃないの？」という指摘（7巻, p. 122）の中で、朝比奈は榊への感情に答えを出せない。そうした描写の後、朝比奈が榊への感情に向き合い、母に「どうしたいかを自分で決めて／結果がどうであれ後悔しない道は私は選ぶ／それが／今の私の生き方だと思う——」と話し（7巻, p. 141）、榊に対しても「私は!!／これからの事を何もわかっていないのかもしれない！ それでも教授と一緒にいたい！／喜びも痛みも共有したいんです！／迷惑だなんて感じる訳ない！勝手に決めつけないで！」と迫るように（7巻, p. 149）、朝比奈と榊が結ばれることは、朝比奈が自身の感情を他者の判断や評価にゆだねることなく表明し追求した結果として描かれる。そうした朝比奈に対する母親の「好きにすればあ？」「もうお母さんは 見守る事しかできなくなっちゃったのね……」（7巻, p. 142）という言葉には、朝比奈と榊の関係性は、指導教官と院生という権力関係をめぐる問題系ではなく、本人の決断をめぐる主体性の問題系の物語となる様子を見ることが出来る。

この女性の「選択」というフェミニズムと相性がよい概念は、90年代以降のフェミニズムの状況を表すポストフェミニズム批評において批判的に着目される。ポストフェミニズムは、フェミニズムの「解放」への志を部分的に受け継ぎつつ、新自由主義的な社会を背景に、許容可能なフェミニズムとそうではない

フェミニズムを区分けする（河野, 2024, p. 594; McRobbie, 2009, pp. 1-2, pp. 14-15）。2000年代以降の文化における性化の浸透の中で、女性は性的客体から性的主体へと移行するが、それは、女性自身の選択として行われる女性をエンパワメントであるかのように提示される（菊地, 2025, p. 77; Gill, 2007, pp. 150-153）。ポストフェミニズムの状況は、海野つなみの『逃げるは恥だが役に立つ』（2012~2017）や『家政夫のナギサさん』など女性向けマンガの世界にも波及している（菊地, 2025; 五十嵐, 2024）。朝比奈と榎のセクシュアル・ハラスメントと親和性が高く不適切な関係は、朝比奈が選択する物語と交差され、選択の物語が前景化し、権力関係に基づく暴力性が不可視化されることによって、あたかもフェミニズム的な女性の主体化の物語であるかのように錯覚することが可能になる。若い女性と中年・初老の男性の間に時として存在する権力関係の暴力性は、若い女性が他の選択肢もあったにも拘わらず、中年・初老の男性との交際を選択するという物語によって隠蔽する。

さらに朝比奈の選択は、病気で余命いくばくもない榎の退職によって、教員学生間の交際ではなく、死期が迫る人との交際を選択するかどうかという問題系にも変化していく。榎の退職と間もなく訪れる死は教員学生間の交際に付随するであろう様々な問題を都合よく忘れさせる。このようにヒロインが中年・初老の男性を選択するという過程は多面的に暴力を隠蔽させる。

なお、選択については、「年の差」恋愛もののお約束事として、中年・初老の男性と同世代の女性が登場するというものがある。多くの場合それは、『年の差婚』の花里の元妻の美雪、『長閑の庭』の榎の元妻の朝霧、『&』の矢飼の元恋人の真由美など、男性の元妻や元交際相手である。彼女たちの存在によって、男性たちは女性の価値を若さに求めて若い女性との交際を望む男性や、同世代に相手にされない男性ではなく、同世代との交際経験もある中でたまたま若い女性と交際するに至った男性となる。特に、『甥の一生』の海江田が30年ほど前につぐみの祖母とおよそ20歳差で恋愛関係にあったエピソードは、海江田が女性の老いを価値を下げるものととらえない人物であることがわかる。

5 おわりに：「年の差」恋愛ジャンルと女性の欲望

本稿では、女性向けマンガの若い女性ヒロインと中年・初老の男性の恋愛を描

く「年の差」ジャンルに関する幻想とリアリティの交渉を検討した。少女マンガやヤングレディースというジャンルは「共感」を根幹にするとされてきた。しかし、現実の若い女性との交際を望む男性の欲望とミソジニーな価値観の親和性の高さ、それに対する嫌悪感や問題意識が女性向けマンガの世界でも共有される状況からは、現実との間の別様の説明が必要である。本稿では、女性向けポルノグラフィの幻想とリアリティに関する視座を手がかりに、「年の差」ジャンルのコードを検討した。

まず、男性の容姿の分析からは二種類の男性像が明らかになった。顔や首のシワやこけた頬、筋肉が落ちた体型などによって加齢が外見に描き込まれる人物と、実質的に外見にさほど年齢が反映されない人物である。しかし、前者の男性も他の中年や初老の人物と比べると、キリッとした眉と鼻筋の通った顔、細い体型やのびた背筋という優れた容姿をもっている。加えて、ヒロインと結ばれる彼らは、仕事だけでなく家事も手際よく行い、ヒロインの相談にも親身に付き合い続ける人物であった。すなわち、彼らは老いが描かれることによってある種実際に存在しそうな人物だと錯覚させるが、実際には、老いさえ描かれなければ少女マンガのスパダリ像であることが明らかになった。

続いて、実社会であれば暴力と親和性の高い関係性や行為に関する幻想とリアリティの交渉を分析した。分析からは、ヒロインの内面のモノログによる再意味付けといった女性向けポルノグラフィと共通する手法が用いられるだけでなく、ジャンル特有のコードが存在することが明らかになった。老いた男性の身体から性的なものが切り離されたり、ヒロインの選択という行為を通じて、同世代の男性よりも中年・初老の男性の方が好ましい人物と描かれたり、ヒロインの主体性の物語として主題が前景化されるといった手法である。それらを通じて、ミソジニーな価値観や現実の暴力と切り離されることで、物語を楽しむことが可能になる。

現実を切り離し幻想を享受する営みは、現実の諸問題を棚上げする態度と考えることもできるかもしれない。現実の加齢と切り離された男性像は加齢を問い直すものではないし、『長閑の庭』のように選択の物語を通じて後景化された問題は時に宙づりにされる。加齢の二重基準に対抗するような物語の検討には、女性の加齢を描く作品などさらなる検討が必要だ。とはいえ、女性の価値を若さに見

出すような男性の欲望に回収されず、むしろそうした期待を一蹴するような幻想の物語の様相を明らかにすることは、家父長制の証拠としてではない、女性たちの欲望への理解を提供する。

作品内でしばしばヒロイン自身が年の離れた男性との恋愛を葛藤する。『Love, Hate, Love.』で、「正しさ」に照らし合わせたら好ましいとされない縫原との交際に江宮は葛藤する。そうした葛藤は位相を変え、現実だと肯定することが困難な関係性が描かれるジャンルへの葛藤につながるのかもしれない。本稿で行った、家父長制的価値観に親和的な若い女性に対する年長の男性の欲望や加齢に関する二重基準に還元されるのではない幻想としての「年の差」ジャンルの様相と、それを支えるコードを読みとき言語化する営みは、葛藤を超えて、江宮が至る〈あなたをスキでいられてそれをあなたに打ちあける／…それはたぶんとても幸運なこと〉という境地にも似た、葛藤を伴いながらもこのジャンルが人々を惹きつけるものであることを言語化することへとつながるのかもしれない。

References

- Ghaznavi, C., H. Sakamoto, S. Nomura, A. Kubota, D. Yoneoka, K. Shibuya, and, P. Ueda. (2022). Fish in the Sea: Number, Characteristics, and Partner Preferences of Unmarried Japanese Adults - Analysis of a National Survey. *Plos One*, 17 (2), 1-18.
- Gill, R. (2007). Postfeminist Media Culture: Elements of a Sensibility. *European Journal of Cultural Studies*, 10 (2), 147-166.
- McRobbie, Angela. (2009). *The Aftermath of Feminism: Gender, Culture and Social Change*. SAGE.
- Radway, J. A. (1984). *Reading the Romance: Women, Patriarchy, and Popular Literature*. The University of North Carolina Press.
- Snitow, A. B. (1979). Mass Market Romance: Pornography for Women is Different. *Radical History Review*, 20, 141-161.
- Sontag, S. (1977). The Double Standard of Aging. in Allman, Lawrence R. and Dennis T. Jaffe eds. *Readings in Adult Psychology: Contemporary Perspectives, 1977-1978 edition*. Harper & Row, Publishers, 285-294.
- アキヤマ香. (2014-2019). 『長閑の庭』1-7, 講談社. (Kindle)
- 五十嵐舞. (2024). 「バリキャリ女子の欠点? —『家政夫のナギサさん』にみる労働力の再生産とフェミニズムの脱政治化」堀川祐里編, 『労働環境の不協和音を生きる—労働と生活のジェンダー分析』晃洋書房, 13-37.
- 上野千鶴子. (2018). 『女ざらい—ニッポンのミソジニー』朝日新聞出版社.
- 大屋洋子. (2009). 『いま20代女性はなぜ40代男性に惹かれるのか』講談社.
- おかざき真里. (2010-2014). 『&』1-8, 祥伝社. (Kindle)
- 岡本由紀子. (2015). 『現代少女マンガにおける女性労働表象の研究——一九七〇～二〇一〇年代の作品を中心に』早稲田大学文学学術院文学研究科博士論文.
- 尾崎衣良. (2015-2022). 『深夜のダメ恋図鑑』1-10, 小学館. (Kindle)
- 菊地夏野. (2025). 『ポストフェミニズムの夢から醒めて』青土社.
- 楠本まき. (2020a). 『赤白つるばみ・裏 火星は鯖でできていて赤いのだ』集英社. (Kindle)
- 楠本まき. (2020b). 「言葉／思考／記録／行動」『エトセトラ』4: 72-77.
- 倉持佳代子. (2020). 「Column ① 竹宮恵子×西炯子——『JUNE』「お絵描き教室」が果たした役割」堀あき子, 守如子編, 『BLの教科書』有斐閣, 35-39.
- 香月孝史, 上岡磨奈, 中村香住編. (2022). 『アイドルについて葛藤しながら考えてみた——ジェンダー／パーソナリティ／〈推し〉』青弓社.
- 河野真太郎. (2024). 「ポストフェミニズムとメディア」ジェンダー事典編集委員会編, 『ジェンダー事典』丸善出版株式会社, 594-595.
- さんずい尺. (2022-2023). 『全力で、愛していいかな』1-3, forcs. (Kindle)
- 志茂. (2020-2024). 『部長と社畜の恋はもどかしい』1-11, ぶんか社. (Kindle)
- タートル, マリア. (1990). 『グリム童話——その隠されたメッセージ』鈴木晶, 高野真知子, 山根玲子, 吉岡千恵子訳, 新曜社.
- 田中東子. (2024). 『オタク文化とフェミニズム』青土社.
- 田中俊之. (2015). 『〈40男〉はなぜ嫌われるか』イースト・プレス.
- 中間淳生. (2019-2022). 『年の差婚』1-6, オンリーリップス. (Kindle)

- 西炯子. (2009-2012). 『甥の一生』 1-4, 小学館. (Kindle)
- 萩尾望都. (2021). 『私の少女マンガ講義』 新潮社.
- ひうらさとる. (2012). 『ホテルノヒカリ』 (講談社漫画文庫) 1-7, 講談社.
- 藤本由香里. (1999). 「少女マンガが愛でる男のカラダ——藤本由香里氏に聞く」『クィア・ジャパン』 1: 24-28.
- 藤本由香里. (2008). 『私の居場所はどこにあるの? ——少女マンガが映す心のかたち』 朝日新聞出版.
- 堀あきこ. (2009). 『欲望のコード ——マンガにみるセクシュアリティの男女差』 臨川書店.
- 堀あきこ, 守如子. (2020). 「BLの浸透と深化、拡大と多様化——2000年代～10年代」堀あきこ, 守如子編, 『BLの教科書』 有斐閣, 57-74.
- みつきかこ. (2015-2024). 『ラブファントム』 1-13, 小学館. (Kindle)
- 守如子. (1999). 「〈ポルノグラフィ〉批判とポルノグラフィを消費する経験との間で」『女性学年報』 20: 168-182.
- 守如子. (2010). 『女はポルノを読む——女性の性欲とフェミニズム』 青弓社.
- 諸富祥彦. (2011). 『【年の差婚】の正体——なぜ同世代に惹かれないのか』 扶桑社.
- ヤマシタトモコ. (2009). 『Love,Hate,Love.』 祥伝社. (Kindle)
- ヤマシタトモコ, 岩川ありさ. (2020). 「私たちを締め出さない物語」『現代思想』 48(4): 57-68.
- ヤマシタトモコ, 三浦しをん. (2015). 「「Love, Hate, Love.」。24歳差恋愛の縫原と貴和子について語り合う!」ヤマシタトモコ『ヤマシタトモコのおはなし本』 祥伝社, 22-35.
- ヤマシタトモコ, 山本文子. (2024). 『ほんとうのことは誰にも言いたくない』 フィルムアート社. (Kindle)
- 横森理香. (1999). 『恋愛は少女マンガで教わった』 集英社.
- 四ツ原フリコ. (2020). 『家政夫のナギサさん』 株式会社ハーバーコリンズジャパン.
- 四ツ原フリコ. (2020). 『家政夫のナギサさん』 1-2, ソルマーレ編集部. (Kindle)

Abstract

A Fantasy: Age-Gap Romance of Women's Manga

Mai IGARASHI

This paper examines the negotiation between fantasy and reality in the age-gap romance genre of women's manga, which features romantic relationships between young female protagonists and middle-aged men. Shōjo manga and the subgenre known as young ladies' comics have long been built around empathy, often aligning with readers' lived realities or offering scenarios readers may find appealing if real-world constraints are temporarily bracketed. The close alignment between men's desire for younger women and patriarchal values, including the double standard of aging, calls for a clearer account of how fantasy is produced and sustained and how the narratives in women's manga negotiate it and insulate it from social and embodied realities.

Building on frameworks developed in the study of female-oriented pornography, this paper analyzes the narrative codes of the age-gap genre in women's manga. The analysis first focuses on the depiction of male characters. Two types of male figures emerge: those whose aging is visibly inscribed through features such as facial wrinkles or physiques marked by age-related muscle loss, and those whose appearance shows few signs of aging. However, even the former are clearly distinguished from other supporting characters by traits such as a slim build, well-defined facial features and an upright posture. Furthermore, male characters who end up with the heroine are portrayed as highly competent not only in their professional lives but also in household chores and emotional support. These portrayals lend an air of plausibility by incorporating signs of aging, yet ultimately, they are revealed to embody the idealized "super-darling" archetype. The analysis then considers the relationships and acts that, in real-life contexts, could be regarded as forms of violence. Beyond techniques shared with female-oriented pornography, such

as resignifying potentially violent situations through the heroine's internal monologue, the genre employs narrative codes of its own. These include separating the sexual from the aging male body and shifting the narrative focus through acts of the heroine's choosing toward a story of her gaining agency. Through character design and plot, the narrative is thus constituted as a fantasy that can be enjoyed precisely because it is disentangled from patriarchal values and violence. Clarifying this structure also helps to articulate the ambivalence the genre provokes and its persistent appeal.

Keywords:

women's manga, age-gap romance, female desire, feminism, double standard of aging

